

幼児教育における国際性

——— 帰国児及び外国人教師をふくむクラスの事例を通して ———

尾崎春人(銀嶺幼稚園)

○野田志摩子(銀嶺幼稚園)

I. はじめに

近年、わが国の国際的諸活動の進展に伴い、家族同伴で海外に勤務する日本人の数が著しく増加している。これらの海外勤務者とその家族にとって大きな関心事の一つに子どもの教育問題がある。住み馴れた日本を離れ、言語・習慣の違う外国で生活することを余儀なくされる子どもたちは二～三年、あるいはもっと長期間、日本とは異なる風土・生活環境・社会組織・大人関係のなかで、多くの場合現地の教育施設で教育を受けながら成長する。諸外国へ永住というのなら話は別だが、昨今は、新聞紙上にも「海外子女」とか「帰国子女」という問題がとりあげられているように、ほとんどの子どもが帰国する。二つの文化にまたがって人格形成期を過ごす子どもたちは外国でどのような経験を積み、それはどのような形で心に残るのか。また、日本にいた時に身につけたものは、外国生活のうちに消失してしまうのか。子どもの心の中で二つの文化はどのように構造化されているのか。又日本に帰国後、それら子女を受け入れた国内の教育施設がどのような指導上の配慮をすべきか、そこに日本人以外の保育者を置く場合の課題などを探ることの意義は大きい。

II. 研究の目的及び方法

本園が受け入れた帰国児、及び公立小学校へ通う帰国児の事例と母親との面接を通し、帰国児にとって望ましい「教育の受け入れ」のあり方を検討すること、また1988年9月19日より本園が研修生として西ドイツから受け入れたアンナ・マリア・トレーク(25歳女性)との交流により、帰国児に与えた影響を探ることを目的とする。

III. 研究結果及び考察

1. 帰国児の事例

① H児について

H児は3歳11ヶ月の時に一家で加州へ渡った。家庭では渡米にむけて特別の指導は何も行わなかった。もともと彼は、ことばを話し始めるのが遅く二文節の文を初めて話したのは、ほとんど3歳になる頃だった。渡米して一ヶ月後にモンテッソーリスクールへ通いだが初めの一ヶ月は泣いて母親から離れられず、スクールの中でもほとんど泣いて過ごした。しかし、一緒に通う日本人の友達や近所に住むアメリカ人の友

達ができてからは楽しんで毎日を過ごすようになった。(この頃はまだ英会話でなく身ぶりや心の通じ合いによる交流)渡米してから三ヶ月位で英語が優位言語になりはじめ、家庭でも皆、英語を話すようになった。一年後、公立のキンダー・ガーデンに通うがこの頃は親が英語で説明不可能なところのみ日本語が使われ、あとは全て英語となった。しかしことばについての遅れは相変わらずで日本語、英語とも三文節以上のことばは話せなかった。このような状態で、日本の幼稚園の年長期9月(6歳1ヶ月)に帰国した。しばらくの間父母とは英語の会話を続けながら近くに住む祖母には、日本語を用いた。幼稚園でも初めの3日は泣いたが、その後担任と話をする時は「Pencil」「lunch」などの単語や色名・数を教える時以外は日本語を使った。担任以外の保育者やクラスの子どもの中にはあまりとげこまず一人あそびをしている姿が目についた。集団でのあそびも隅からみているようすがよくみられたが、クラスにいる外国人教師に対しては親しみを感じている様子が伺えた。入園三ヶ月後には英単語も消え、日本語で友達や保育者に話しかける姿もみられるようになった。母国語の遅れを抱えたまま渡米し、外国語の言語と文化を受け入れなければならなかったことが彼のことばの発達と情緒面に何らかの影を落した原因とみられている。

② K児について

K児は2歳2ヶ月の時、家族と共にシカゴに渡り、その四ヶ月後にモンテッソーリスクールに通いだした。正しい日本語と正しい英語を学ばせたいという親の考えから家庭内では英語を使うことを拒否した。スクールではまわりの雰囲気から友達づきあいを始め、三ヶ月後にはほとんど英語を話せるようになった。彼は幼稚園の年中時1月に一時帰国し、母親は、友達とのけんかやあそびの中から日本語を学んでほしいという気持ちから三週間G幼稚園に通園する。その後、再渡米し4歳9ヶ月の時に帰国し幼稚園に入るが日本語に慣れていたせいか、戸惑う所もみられず進んで友達の中に入り、友達の名前を覚え、一緒にあそびようになった。幼稚園の中では片言の英語も聞かれなかった。

③ S児について

S児は父親の転勤に伴い、3歳1ヶ月から5歳2ヶ月

月までの間、ロスアンジェルスに滞在した。ハヶ月後ナースリーに入る。一年位で英語による日常会話はできるようになったが、家の中では努めて日本語を使うようにした。(ただし兄弟の間ではやはり英語が使われていた)又、近くに日本人の家族が多いたせいか日本語を使う機会は多くあった。このような状態で帰国し、幼稚園に編入した時もことばなどについての戸惑いもみられず、近所の友達と仲よくなり喜んで通う姿がみられた。保育者の問いかけや説明も明確にとらえ実行に移すことができる。

④ T児について (H児の兄)

Tは幼稚園年長2学期から小学校2年2学期までをアメリカで過ごした。渡米して三ヶ月もすると英語主体の生活となり、家庭の中でも、日本語で言えという適当な表現を思いつくのに時間がかかり、つい黙りこくってしまうので、英語を使うことを黙認せざるを得なかった。現地のスクールでかなり自由な学校生活をしていたTは、日本で以前住んでいた地域にもどり地元の小学校2学年9月に編入する。ことばがうまく話せないことやトレーナーを腰に巻いたり、フード付トレーナーを着てはいけないなどの禁止事項が多く、先生の目の届きすぎる学校が嫌いで何回も登校拒否をおこした。先生からは皆に合わせるようにと言われ、彼自身も友達から変わっていることをとやかく言われるのが嫌さに次第にあわせるようになった。

⑤ Y児について (K児の兄)

Yは現地の公立スクール1年時に父の赴任について家族と一緒に渡米した。1年生ということで恥じらう心もあったのか一年間は、ほとんど英語を話さなかった。最初は外国人の為のESレスクールに通ったが、とにかく口から英語が飛せられるまでには時間がかかった。一度ことばがでてくるとそれからは自然に話をしたり、書くようになったが、母親の考えもあって家では日本語しか使わず、英語はアメリカ人に対してのみの言葉だった。母親は毎晩30分位の間、日本の本を読んで聞かせ、Y児もそれにつられて日本の本を喜んで読むようになった。英語を話すようになり、彼の外国での生活は快活・陽気で自信にあふれるものだった。このような状態で公立小学校5学年の2学期に帰国した。日本語を覚えていたせいもあって言葉についての問題は少しもなかったが、アメリカでの生活の為か自己主張が強すぎると学校で何度も注意された。又、行動面において日本育ちの日本人とは異質な何かを同級生が感じていたのが「アメリカ人」と仇名をつけられたことは、彼にとって納得のいかないものだった。レ

かし、アメリカで週に一度補習校に通っていて、アメリカンスクールと補習校では態度を変えなくてはならない(ポケットからキャンディをだしていく・えんぴつを削っていく)ことなどを知っていた為、日本の学校に対しても極度の戸惑いはなかった。

2. アンナ・マリア・トレークの存在

アンナ・マリア・トレークは、国際キリスト教青年交流を通じて来日し、1988年9月19日より、本園の研修生(5歳児クラス助手)として毎週木・金曜日の2日に下記の様な活動を行っている。

時間	活動内容
8:30	出勤 教材準備、環境設定、子どもを迎える
9:15	年長Aクラス(担任N教諭の助手として)点呼など
9:30	自由活動(異年令集団による自発的活動) 運動・絵画製作・視聴覚・ダンス・指人形活動などに保育者として参加
10:45	年中A・Bクラスにて(ドイツ語による指導) うた…Hannschen Klein ○ Tannenbaum Winter Ade ゲーム…Laurntia
11:30	昼食(年長Aクラスにて)
12:45	年中C・Dクラスにて上記のうた・ゲームの指導
14:30	保育室の整備
15:00	休憩
15:30	クリスマスのアドベント・カレンダーづくり など明日の保育への教材準備
16:30	退園

3. 考察とまとめ

G園の心を開いて人や文化を受け入れる保育システムは、H・K・S児たちにとって、大した苦勞もなく反響に加われ、G園児の一人となることを容易にしたと言えよう。

特に①言語又は情緒に障害をもつH児の場合、一斉保育を主とした施設では、既に登園拒否をしていたであろうし、障害をもつ子どもを特別扱いするところでも同様であったと思われる。

②Y・T児の例にみられるように、画一的、非個性的、閉鎖的な教育の場と化した公立小と対比した時、個性の育成と尊重を第一に、異文化に進んで親しむ寛容、態度をオープンな雰囲気の下で養育することが、指導上の配慮としてもとめられてよい。

以上